

NHK「日本の宿題」プロジェクト編

～悩める教師たちの現状(秦政春、黒沼克史)～

レポートの概要

2000年9月の福岡県の小中学校の教員を対象とした調査によると、これまでに授業が成立しなかったことがありますか」という調査で、小学校で13%、中学校で20%が感じている。

また、教師を辞めたいとがある割合は、小学校46%、中学校47%であった。ストレスについても、72%の先生が感じているという結果がでた。

ストレスの原因として 多忙、研究授業、自分の力量、学校行事の準備、校務分掌など(複数回答)をあげている。

ある家庭を持つ女性教師の一日について取材では、朝は、朝礼、欠席者の確認、そして授業、昼は駆け込みの食事、そしてまた授業、ひと段落をつく間もなく、クラブ活動や会議、さらに突発的な業務が入り、8時頃家についても、受け持ち父母との連絡、また、深夜になるまでの学級事務をこなす、そんな毎日である。

教育という仕事はどこまでやってもきりのないところがあり、また、成果や実績が見えにくいところがある。したがって多忙感に追いまわられても達成感が得られにくい。また、保護者から「まじめにやってあたり前」程度の評価をされている。

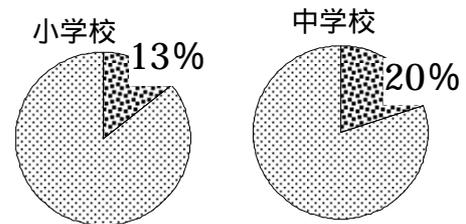
校務の忙しさが増大すればするほど、本来一番に目を向けるべき子どもから目が離れてしまっていることを感じる教師も多い。

子どもとのコミュニケーションが不足することが起因して、ベテランの教師でも「子どもになめられている」と感じる傾向が高くなり、それがまた、教師を芯から疲れさせることにもなっている。

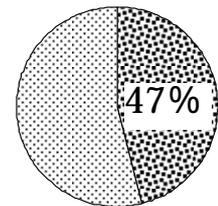
疲れがたまった教師達は、ついには学校へ行くことができなくなり、入院してしまうこともある。文科省の調べによると教師の休職の理由の4割がこころの問題であるという調査がある。心身のバランスを崩してしまう先生は、比較的まじめで、自分で何でも背負い込んでしまうタイプが多い。学校内部に先生をサポートするシステムが必要であろう。

悩める教師を救うためには、学校が発信基地となりながらも、家庭、地域が連動して子

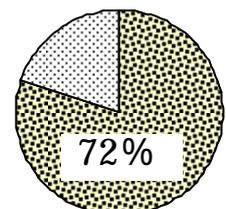
授業が成立しなかったことがある割合



教師を辞めたいと思ったことのある割合(中学校)



小中学校教諭でストレスを感じる割合



■あり □なし

どもが抱えている問題を解決していかなければならないし、そうしないと問題の解決はできないであろう。

教師は、「5時までが勝負」ということを提唱したい。ストレス、疲労、家庭の犠牲の上に成り立つ教師にいい教育はできないであろう。わかりやすい授業をすることを仕事の最重要順位となるよう改革していくことが重要であろう。

教師という職業が向いていないと思う割合

小学校

中学校

